

高等学校家庭科における衣生活実践への動機づけ —ホームプロジェクトをとおして—

Motivation to Practice by Daily Life as to Contents of Clothing
in High School Home Economics
— Through Home Projects Class —

天本 旬子

Shunko AMAMOTO

(家政教育コース)

長山 芳子

Yoshiko NAGAYAMA

(家政教育講座)

(平成25年9月30日受理)

要 約

本研究では高等学校家庭科のホームプロジェクトをとおして、課題発見やテーマ設定時における教師の助言が、課題設定への動機づけや課題を解決するための計画・実践に効果があるか、衣生活分野において検討した。

生徒自身の生活実践度について自己診断チェックシートを使って評価すること、教師が一斉指導や個別指導の際に助言を行うことは、ホームプロジェクトのテーマ設定・計画においては効果がみられた。しかし、実践レポートでは、調査・研究・実践にとどまる内容が多く、テーマ設定時の動機づけを、反省・評価まで持続できる効果は得られなかった。ホームプロジェクトは、テーマ設定後も、実践の段階を上げることや、知り得た情報や知識をいかに日常に結びつけ生活行動へと繋がる指導・助言、レポートの書き方への支援などが必要であることが課題と言える。

キーワード：ホームプロジェクト、衣生活教育、高等学校家庭科

1. 諸言

高等学校家庭科では学習指導要領の改訂により、共通科目としての家庭科においては、「家庭基礎」(2単位)、「家庭総合」(4単位)、「生活デザイン」(4単位)が設けられ、いずれか1科目を必修科目として履修することとなった¹⁾。高等学校の多くが「家庭基礎」を選択しており、授業時数が少ない中で、家庭科学習者のモチベーションを上げ実践へと結びつけるまでの指導を考案していく事が難しくなっている。

日常生活においては、家庭で衣服を作ることがなくなり、大半が海外生産のものを消費する生活²⁾をしているのが現状である。さらに生徒自身の生活の中で、自らの衣生活を計画したり主体的に営もうとしたりする意識は低く、課題が何かさえもわからないのが現実である。

高等学校家庭科の衣生活分野では、自分の衣生活を見直し、グローバルな視点を持って衣生活を営むことができるような生徒に育てることが必要ではないかと思われる。それにはまず行動に繋がる動機づけと、生活実践に結びつける知識と思考力が不可欠となる。また、思考力を持たせることは生活実践の質を高めることができるか考える。

そこで本研究では、まずホームプロジェクトをとおして、高校生の家庭生活の行動実態、特に衣生活の行

動実態を把握するとともに、自らが家庭生活において問題点・改善点を発見し、問題解決学習を行うことで、家庭生活の中で実践できる力を身に付けさせることを目的とした。

また、衣生活分野においては、ホームプロジェクトの計画および点検段階における教師からの助言が、テーマの選択への動機づけや企画の完成度水準、実践水準に効果があったかどうかを検討することとした。

2. 実践方法

2.1 対象

実施校は、「家庭基礎」を履修する福岡市の公立高等学校1年生とした。8クラス、320名である(有効回答率95.3%)。

2.2 ホームプロジェクトの指導過程

家庭科担当教師2名が、各4クラスを担当した。

(1) ホームプロジェクトの実施計画を立てる。

(授業1時間)

正課授業1時間は、次のように行った。

- 1) ホームプロジェクトを学習する目的と、本時の学習内容を確認する。
- 2) ホームプロジェクトの進め方について、具体的な内容をみる。(DVD視聴)

- 3) 生活の自己診断を、チェックシート³⁾を使って行う。家庭経営・食生活・衣生活・住生活・保育・その他の6分野各5項目、全30項目について、自己診断(○:行っている, ×:行っていない)をさせた。(表1)
- 4) 具体的な内容を考慮し、テーマを決定する。指導上の留意点として×の数に着眼させ、テーマ設定時の考え方を示唆した。また、衣生活について、全体への意識的アドバイスや机間巡視時の個別助言を行った。

(2) 計画書の提出と点検(授業外)

生徒が提出した計画書の点検を行った。

点検を行う場合、計画の完成度水準は3段階とし、レベル3:テーマ設定・設定理由・実践内容の全て記載、レベル2:テーマ設定・設定理由(具体的課題)または実践内容、レベル1:テーマ設定のみ記載で評価した。

点検を行う際に、レベル2以下の計画書には赤字でアドバイスを書き入れた。さらにレベル1のものは再提出をさせた。

(3) ホームプロジェクトの実施(夏休みの課題)

生徒は、各自が計画したテーマに従って、夏休み期間中に実施し、実施過程を記録した実践レポートを作成した。

(4) 実践レポートの提出と評価

実践レポートは、夏休み終了後に提出させ、AからEまでの5段階(表2)で評価した。ここで、調査とは課題を解決するために、文献やインターネットによる情報収集や、自分の生活実態の現状や課題を把握するための調査とした。研究とは、課題解決のための工夫や、生活の改善・向上を考慮したこととし、実践とは、実生活において実施した行為をいう。

(5) 発表会

発表会はクラス毎に教師が3名程度選定し、授業中に発表させる予定であったが、本年度は授業時数の都合により実践レポート展示とした。

2.3 ホームプロジェクト実践の分析

生徒の生活実践状況は、生活の自己診断チェックシートについて、行っていない×の数を分野ごとに集計し、検討した。

次に計画については、設定したテーマの分野および内容の種類、計画の完成度水準を分類し検討した。

実践については、実践レポートの分野および内容、特に衣生活分野では、評価値と生活実践チェック値を用いて検討した。

表1 生活の自己診断チェックシートの内容

分野	チェック項目
家庭経営	1 家族の一員として責任ある家庭生活を送っている
	2 有効な時間の使い方を心がけている
	3 家族のコミュニケーションを持つようになっている
	4 高齢者の生活や心身の特徴を理解している
	5 高齢者や障害を持つ人とのふれあいができる
食生活	6 一日三回、バランスのとれた食事をしている
	7 間食の量や内容に気を付けている
	8 食品の安全性を気にしている(添加物や農薬など)
	9 健康を考えた家族の食事を作ることができる
衣生活	10 環境を考えた食生活を送っている(洗剤の使用・ゴミ問題など)
	11 衣服の購入は計画的に行っている
	12 衣服によって自分の個性を表現できる
	13 自分で衣服管理(洗濯・アイロンかけ・収納など)を、することができる
	14 服の表示はよく見て購入している
	15 ボタンが取れたり、服がほつれたら自分で直すことができる
住生活	16 部屋の中は整理整頓され、機能的である
	17 住まいの安全対策(災害、防犯、救急)をたてている
	18 住まいの中に心が安らぐ空間を作る工夫をしている
	19 誰もが暮らしやすい住まいを考えることができる
保育	20 省エネやリサイクルを心がけている
	21 青年期にふさわしい生活習慣を心がけている
	22 こどもの心身の発達をよく知っている
	23 現在のこどもを取り巻く環境について考えたことがある
	24 児童文化財(おもちゃ、絵本など)に興味がある
その他	25 小さなこどもの相手をするのが好きである
	26 消費者トラブルに巻き込まれたことはない
	27 生活情報を適切に取り入れ、暮らしに生かすことができる
	28 計画的な金銭の運用(無駄遣いをしない)ができる
	29 一人で暮らせる自信がある
	30 自分のライフプランを考えている

表2 実践レポートの評価基準

評価	評価基準	点数
A	調査+研究+実践	85
B	調査+研究(両方が少しはみられる)+実践	75
C	調査または研究+実践	65
D	調査のみ または 実践のみ	55
E	枚数不足、内容不足	45

3. 結果

3.1 生活の実態

(1) 各分野の生活実践値

生徒の家庭生活における実践状況は、生活の自己診

表3 各分野各5項目中の×数 (平均)

	家庭経営	食生活	衣生活	住生活	保育	その他	合計
男	1.74	2.56	2.64	2.18	2.42	1.91	13.46
女	2.05	2.52	1.95	2.53	2.19	2.17	13.41

男 (n=136) 女 (n=169)

表4 衣生活分野各項目の×数 単位：人 (%)

項目番号	男	女	合計
11	66 (48.5)	78 (46.1)	144 (47.2)
12	51 (37.5)	23 (13.6)	74 (24.3)
13	67 (49.3)	53 (31.4)	120 (39.3)
14	96 (70.6)	126 (74.6)	222 (72.8)
15	80 (58.8)	50 (29.6)	130 (42.6)

(n=136) 女 (n=169) 合計 (n=305)
%の母数はそれぞれ、男、女、合計の人数

断チェックシートの結果から把握することとした。

チェック項目の×数を生活実践値と見なし、6分野の各チェック項目5つのうち、×の数を集計した結果を表3に示した。

家庭生活で行っていない行動を、×の数でみると、全30項目のうち13項目以上あり、男女ともに生活実践値は低いと言える。

各分野で×が多いのは食生活であり、次いで住生活、保育、衣生活の順になった。男子は衣生活、女子では食生活、住生活に×が多かった。

後述するように、ホームプロジェクトのテーマに食生活を選択する者が大変多かったが、興味関心に関わらず家庭生活では実践が少ないことが分かった。

衣生活分野の生活実践値に男女差がみられたが、著しく低いとは言えない。

(2) 衣生活分野

衣生活の生活実態を詳しくみるため、衣生活分野の各チェック項目に×を付けた人数と割合を表4に示した。

衣生活分野5項目の中で、×の割合が最も少ないのは「12衣服によって自分の個性を表現できる」24.3%であり、比較的实践できていると言える。

一方、×の割合が最も多いのは、「14服の表示はよく見て購入している」72.8%であり、あまり実践できていないと言える。これは、「11衣服の購入は計画的に行っている」が過半数あることを考慮すると、自分で購入する生徒の多くは表示を見ていないということが推察される。

男女差がみられたのは、「12衣服によって自分の個性を表現できる」、「15ボタンが取れたり、服がほつれたら自分で直すことができる」、「13自分で衣服管理をすることができる」であった。特に「衣服によって自分の個性を表現できる」は大きな差がみられた。

牧野カツコらの調査⁴⁾では、高校生の衣生活の実

態は、①せんとく機で衣服のせんとくを、いつもあるいは時々するのは31%、②せんとくものをたたむのは41%、③ボタンのとれた時にボタンをつけるのは30%、④季節や気候にあった服装を自分できめるのは93%であり、④以外の実践は低く、いずれの項目についても女子の方が男子に比べ実践率が高いと報告している。

本研究対象の生徒の衣生活実態も、牧野らの調査と同様の傾向であり、特に衣服管理において実践率が低いことが分かった。

3. 2 ホームプロジェクトのテーマ設定

(1) テーマ設定までの過程

テーマ設定の手順は、①生活の自己診断チェックシートを使って、○・×の自己診断、②分野毎に○と×の数を集計、③テーマの決定である。

③テーマを決定する場面で、一斉指導時の生徒への助言は次のとおりとした。

まず、興味関心を考慮しながら自分で設定するように伝えた。次に、テーマが決まりにくい者に対して、×の多い分野に着眼するように示唆するとともに、×の多い分野を無くしていく事で全体の底上げとなり、結果として家庭生活をバランスよく、より良いものにする事が出来ると伝えた。これは例年選択テーマとして大半を占める食生活分野以外の分野への広がりも考慮している。

個別指導時の助言は、机間巡視時の質問に対して答えた。授業では4クラスとも、質問の殆どが机間巡視時にあった。具体的に多かったのは、自己診断チェックシートの30項目についてであり、各チェック項目の内容の意味や、「この中から選ばなければいけないか」などであった。教師は、各チェック項目に拘らず、他の内容を選択してよいことを説明した。

食生活分野については、料理の回数についてなどの具体的質問が多かった。ファーストフードやアレルギーについての話題も挙がった。

衣生活分野については、UVカット効果の衣服について質問があり、素材(被服材料)の説明をした。また、衣生活項目に×印の多い生徒から相談があり、衣服計画の実践や衣服管理の中の洗濯などについて、助言を行った。

(2) 計画時のテーマ

1) テーマの分野

提出された計画書のテーマについて、各分野の人数とその割合を表5に示す。

提出した計画書のテーマをみると、食生活分野を選択した生徒は全体で54.9%であり、他の分野と比べて食生活分野を行ってみようというモチベーションは比較的高い。具体的なテーマとしては「弁当作りに挑戦しよう」や、「朝食づくりに挑戦しよう」など、日常

表5 計画時に設定されたテーマ 単位：人 (%)

分野	男	女	合計
家庭経営	12 (8.6)	7 (4.2)	19 (6.2)
食生活	61 (43.9)	107 (63.1)	168 (54.9)
衣生活	14 (10.1)	16 (9.6)	30 (9.8)
住生活	31 (22.3)	29 (17.4)	60 (19.6)
保育	7 (5.0)	2 (1.2)	9 (2.9)
その他	14 (10.1)	6 (3.6)	20 (6.5)
合計	139 (100.0)	167 (100.0)	306 (100.0)

自分で実践していないので夏休みには母親に代わってやってみよう、というものが大半であった。

住生活分野のテーマを選択した生徒は、全体の約19.6%であった。その内容に関しては過半数が自分の部屋の整理整頓であり、次いで住まいの安全対策、省エネ・リサイクルに関してであった。

衣生活分野のテーマを選択した生徒は、全体の9.8%、30名であった。30名のテーマについて、自己評価チェックシートの衣生活分野5項目のうち、どのチェック項目番号(11～15)に対応しているか、計画の完成度水準はどのレベルであったかを表6に示した。

衣生活分野のテーマで、チェックシート5項目に対応しているのは20件で、内容は衣服管理が19件、計画的購入が1件であった。衣服管理19件の内訳は管理のみ11件、管理+直す5件、管理+表示3件であった。5項目に対応していないテーマが10件あった。

一斉指導時の説明内容は、衣服計画的な事(持っている衣服の把握・その日に合わせた選び・購入)、被服管理(誰がしているか・洗濯機・洗剤・手洗い)、経済的な事(リサイクル・古着・消費・ファストファッション)、伝統的な事(誰がつくるか・歴史、着物・繊維・素材)、等とした。

例えば、経済的な事として、若者に人気のH & M、フォーエバー21といったファストファッションの代表店を挙げ、その価格の安さや製造国、最近のバングラディッシュにおける縫製工場火災事故について話した。伝統的な内容としては、浴衣の着用場面として花火大会を取り上げ、織りや染め方について話した。

計画時のテーマをみると、チェックシート衣生活分野5項目の中では被服管理が19題と多かった。さらに5項目に該当しないテーマも9題と多いことから、教師の説明に対するレスポンスがあったことが認められた。特に、チェックシート5項目に該当しないテーマとして表6の「24.世界の伝統衣装」や、「25.過去何年間かの流行服・世界の衣服」等は、授業時に資料集を使って紹介した写真のインパクト・視覚的効果がみられたのではないかと推察できる。また、「21」「22」は、新合織を挙げ、衣服材料の進化がもたらした衣生活の変化について話したことが影響したと思われる。「23」「29」「30」には、使わなくなった家族の服をリ

表6 衣生活分野のテーマ

計画時のテーマ	チェック項目番号	完成度
1 計画的な衣服の購入	11	2
2 衣生活	13	2
3 衣生活	13	1
4 衣生活	13	1
5 一人で洗濯アイロンを出来るようにする	13	1
6 自分で衣服の管理を出来るようにする	13	2
7 衣生活	13	2
8 衣生活	13	1
9 衣生活	13	2
10 衣生活	13	1
11 母さんを助けよう	13	2
12 衣生活	13.	1
13 衣生活	13.14	2
14 衣生活の自立と改善	13.14	3
15 服の表示について	13.14	2
16 衣服管理をしっかりとし、服を直したりする	13.15	2
17 衣生活	13.15	2
18 衣生活	13.15	2
19 衣生活	13.15	2
20 衣生活	13.15	1
21 昔から今にかけての服の変化		2
22 時代ごとの制服の変化		3
23 着なくなった服でダッフィー衣装を作る		2
24 世界の伝統衣装		2
25 過去何年間かの流行服・世界の衣服		2
26 和服の柄・色		2
27 ファッション(今の流行・日本と外国の違い)		1
28 同じTシャツを使ってどれだけ着回しできるか		3
29 洋服をデザインする		2
30 布のリサイクル		1

メイクした昨年の実践例紹介や、リサイクルショップの活用などで環境にも経済にもやさしい衣服計画が実践でき、しかも自己のファッションを楽しむことができること紹介したことも影響したと推察される。

2) 計画の完成度水準

各分野の計画段階の完成度について、検討した。表7に、各分野における計画の完成度水準が、レベル1の人数と割合を示した。

計画の完成度水準レベル1(L1)は、テーマ設定のみ記載のため、再提出させた内容である。このレベル1の計画は、男子43%、女子31%、全体で37%となった。

これらの4割近い数の生徒が、テーマ設定の理由が記載できておらず、自分にとっての課題や改善点は何か、それを解決するために何を実践しなくてはならないのかなども含め、思考方法が分からない、あるいは

表7 計画の完成度水準レベル1の人数と割合
人 (%)

		家庭 経営	食生活	衣生活	住生活	保育	他	計
男	選択	1	32	6	17	4	9	69
	L1	1 (100%)	11 (34%)	3 (50%)	11 (65%)	3 (75%)	1 (11%)	30 (43%)
女	選択	2	60	10	8	1	3	84
	L1	1 (50%)	21 (35%)	2 (20%)	0 (0%)	1 (100%)	1 (33%)	26 (31%)
合計	選択	3	92	16	25	5	12	153
	L1	2 (67%)	32 (35%)	5 (31%)	11 (45%)	4 (80%)	2 (17%)	56 (37%)

※天本担当クラスのみ
%の母数は、各分野の選択者数

主体的に計画をたてる意欲が無いのではないかと考えられる。

テーマ選択者が圧倒的に多い食生活分野でも、その35%が再提出者であった。食生活分野は、取り組みやすい、興味・関心が高いのではないかと予想したが、レベル1が高い割合を示しており、実際は課題解決に繋がるテーマを設定し実行しようというモチベーションがあるとは言い難い。

衣生活分野では、表6のとおり、レベル1は9名(30%)、レベル2は18名(60%)、レベル3は3名(10%)であった。衣生活分野においても、レベル1が3割を占めており、レベル2を含めると9割の生徒が、具体的実践方法が分からないようであった。課題や改善点を具体的に設定でき、実践方法も分かるレベル3の生徒は少ない。

計画の完成度水準を高めるためには、教師のテーマに関連する説明・助言内容によって動機づけができたとしても、その後の支援が必要であることを示唆している。

3.3 ホームプロジェクト実践内容

(1) 実践レポートの評価

10月3日現在に提出したレポートについて、A～Eまでの5段階で評価した。

また、生活の自己診断の×の合計の平均が13.4個であることから、×の総数が13項目以下を生活実践値の高グループ、14項目以上を生活実践値の低グループに分け、家庭生活行動において実践をよく行っているかどうか、レポートの評価に影響しているかをみる為に、生活実践値との関係を含め表8に示した。

表8において、全分野の実践の評価をみると、A判定の者はおらず、D判定の実践のみまたは調査のみが55.4%、E判定のレポート内容または枚数不足

表8 実践レポートの評価と生活実践値の関係
n=148

実践レポートの評価			生活実践値	
評価	(%)	人数 (%)	グループ	人数 (人)
A	19.6	0 (0.0)	高	0
			低	0
B		9 (6.1)	高	7
			低	2
C		20 (13.5)	高	10
			低	10
D	80.4	82 (55.4)	高	45
			低	37
E		37 (25.0)	高	15
			低	22

が25.0%あった。このD判定およびE判定を合わせると約8割が、反省・評価部分が不十分であり、次への課題につなげることができていないと言える。

生活実践値による違いは、B判定にのみみられたが、他の評価では人数的な違いは認められなかった。

日常の家庭生活において、比較的实践を行っている者とそうでない者との差はみられなかった。

(2) 衣生活分野の内容評価

衣生活分野のテーマについては、計画時から実践時に他分野に変更したものが9テーマ(住生活7、食生活2)あり、逆に他分野から衣生活分野への変更が4テーマあった。未提出の1テーマを除いた24テーマについて検討した。ここで、レポートの中には他の分野と組み合わせられているものがあったが、衣生活分野についての実践が含まれているものについては衣生活分野を選択したものとして集計した。その結果を表9に示す。

衣生活分野の実践レポート数は24件となり、前年度の12件と比較して多くなった。これは、教師からの助言は意思決定において影響があると言える。

レポート評価と生活実践値の関係は、C判定で若干関連が見られたものの、全体として日常生活での実践

表9 衣生活分野の実践レポートの評価

n=24

実践レポートの評価			生活実践値	
評価	(%)	人数 (%)	グループ	人数 (人)
A	29.2	0 (0.0)	高	0
			低	0
B		1 (4.5)	高	1
			低	0
C		6 (27.3)	高	4
			低	2
D	70.8	12 (50.0)	高	6
			低	6
E		5 (20.8)	高	2
			低	3

との関連は認められなかった。

衣生活分野 24 テーマについて、A 判定はいなかったが、B 判定と C 判定の合計が 29.2% となり、他分野より僅かであるが多くなっている。

一方、レポートの具体的内容をみると、調査中心のものが多く、これらは今回の評価基準では D 判定となった。これは、生徒が、内容は調査するだけでなく自分の生活に直接結びつけることを意識して、レポートにまとめることができなかつた結果と考えられる。しかし、教師の側にも、ホームプロジェクトは問題解決学習であることから、良い実践⁵⁾を紹介したり、新たな学習方法⁶⁾を取り入れたりなどして、プロジェクトのテーマ内容を実生活に結びつけることが重要であることを、テーマ設定・計画時に指導・助言することが今後の課題である。

4. まとめと考察

今回のホームプロジェクトの授業をとおして、得られた知見は、次のとおりである。

- (1) 今回ホームプロジェクトのテーマを決め、実践する動機づけとして、○×形式の生活自己診断チェックシートを取り入れた。

生徒たちがホームプロジェクトを実践するにあたって、テーマ設定がまず困難な点となっていた。自己診断をし、自分が日頃から行っていない事や実践できていないものは何かを見つめ直し、課題へと結び付けていく視点を見つけるという意味では大変効果的だったと言える。

しかし、今回使用した自己診断の内容について、教師自身が十分把握したり、あるいは中学校家庭や高等学校 1 学期までの履修内容を考慮するなどを検討することが今後の課題である。

- (2) 実践内容については、問題解決学習として成り立っていない内容が、全分野の約 8 割近くを占め、計画の段階でレベル 1 が 4 割近くあった。これらの原因として、まず①問題解決をするということの考え方が分からない、②生活の中で経験がない③今いるところのレベルが判断できないなどが考えられる。

今回のレポート内容では、調査だけのものが多かった。これについては、知らなかつた知識や情報について調べただけでも、生徒自身の知識は豊富になり、今後の生活改善に繋がる可能性がある。ホームプロジェクトとしては、実践の段階を上げることや、知り得た情報や知識をいかに日常に結びつけ生活行動へと繋がるように指導していくかが課題と言える。

- (3) 計画段階でのテーマ設定において、衣生活分野への意識的助言を行った。計画時のテーマをみても助

言に対する反応がみられた。しかし、テーマ設定時の助言のみでは実践へと繋がる十分な支援にはなり得ていなかった。今後は、授業の中でも平素から生徒に伝えるべき内容を日々探索していく事が求められる。

なお、今回行った評価基準とは別の基準でみると今後の衣生活行動に期待できるレポートもあった。例に挙げると、コンサートに着る服をリメイクする内容で、自己評価においては、「裁縫やデザインをすることの楽しさや、自分で考えて物を作る事の大切さを知った」「友達に褒めてもらった」「次回作る服のデザインが浮かんだ」等があった。実践のモチベーションを上げるものが今後の行動に繋がるのではないかと考えられる。

他に、実践したことが家族に喜ばれたり、褒められたりなど、家庭生活の上での役立ち感や必要感が自己評価にみられたものは、今後の行動が期待できる要素を感じるものが多かった。

高等学校家庭科はこれまで、自立したときや将来家族をもったときなどという動機づけが多くされてきた。しかし変化する社会や価値観の中で、価値ある動機づけを設定することが困難となりつつある。

日常の衣生活の中でも、価値があると思わせられるような説明や導きができる内容や指導法を研究していく事が求められる。

引用文献

- 1) 文部科学省, 高等学校学習指導要領の解説 家庭編 (2010) p.5
- 2) グローバル経営の教科書「カワイイ」を支えるファッションビジネス最前線, 日経 BP ムック・日経ビジネス (2013) p.22 ~ 29
- 3) 全国高等学校家庭クラブ連盟編, FHJ ~ ガイド & ワークブック ~ 改訂 5 版, 財団法人家庭クラブ発行 (2005) p.2 ~ 3, 5, 7
- 4) 平成 13 年度科研 (A) (1) 研究代表 牧野カツコ, 「児童生徒の家庭生活の意識・実態と家庭科カリキュラムの構築—家庭生活についての全国調査の結果—」日本家庭科教育学会 (2002) p.24 ~ 28
- 5) 岐阜県立岐阜城北高等学校 家庭クラブ, 衣生活分野を中心とした「ホームプロジェクト研究」の取組, 日本衣服学会誌 vol.56 no.2 61 ~ 63 (2013)
- 6) 福田恵子・後藤真理, 実践的推論を導入した問題解決学習の効果—ホームプロジェクトにおける学習方略の変化の観点から—, 家庭科教育学会誌 vol.55, no.3 p.150 ~ 161 (2102)